

マッチ売りの少女はなぜ死んだのか



先月大阪の小学生が SNS を使って誘拐され、自分で逃げ出して交番に保護されたというニュースがありました。交番に保護されるまでの3時間半、靴もはかず傘もささず雨の中を歩いていたにもかかわらず、心配して声をかける人も、警察に連絡する人もいなかったそうです。わたしはそれを聞いて、アンデルセン童話のひとつ、マッチ売りの少女を思い出しました。

「むかしむかしあるところに、一人の貧しい少女がいました。雪の降る寒い大みそかの日に、少女はお父さんに言われて町の中に立ち、はだしてマッチを売っていました。お母さんのお古の靴は大きすぎて、途中で脱げて無くなってしまったからです。「マッチはいりませんか？だれかマッチを買ってください！お願いします！一本でいいので買ってください！」少女がいくら叫んでもだれひとり立ち止まる人も、マッチを買ってくれる人もいませんでした。少女はものすごく寒くておなかがすいていましたが、マッチを全部売らなければ家に帰ることはできません。家に入れてもらえないどころかお父さんにたたかれるからです。



少女はあまりの寒さに、建物のかげに入り、売り物のマッチをつけて温まろうとしました。するとどうでしょう。マッチをつけるたびに、暖かいストーブやごちそう、クリスマスツリーが現れるのです。でもマッチの火が消えると同時に全部消えてしまいました。次にマッチをつけると、もう死んでしまったけれど、自分にやさしくしてくれたおばあさんが現れました。少女はありったけのマッチをつけておばあさんに言いました。「わたしを置いていかないで！わたしを連れて行って！！」

翌日のお正月の朝、町の人々はマッチを握りしめて死んでいた少女を見つけて、「かわいそうに」と言いました。

童話を読んでマッチ売りの少女についてわかることといえば、お父さんはとても怖い人で暴力をふるう人だったこと、このような小さな少女にマッチ売りをさせるような貧しい家だったこと、亡くなったおばあさんだけがやさしかったということから、お母さんがいたとしても少女を守ってくれる人ではなかったこと・・・くらいです。

さあ、ではマッチ売りの少女はなぜ死んだのでしょうか。

一番の原因は、寒さと空腹です。

雪が降るような寒い日に、靴もはかず、帽子もかぶらず、ご飯も食べさせてもらえない空腹の中で、一日外で立っていたのですから、弱って凍死したのかもしれませんが。または普段から栄養不足で体調が悪く、寒さに耐えられず倒れてしまったのかもしれませんが。



でもそれは本当の理由ではありません。

マッチ売りの少女が死んだ理由のひとつ、それは、少女が「助けて」と言えなかったことです。

もし少女が「マッチを買ってください！」のかわりに「誰か助けてください！」と言えたら・・・

「マッチを売って帰らないとわたしは家に入れてもらえないのです。お父さんに殴られるのです。帰る家が無いのです。だれか助けてください！！！」と言えたら・・・



「マッチを買ってください」では誰も立ち止まらなかったけれど、こう叫んだらもしかしたら、だれか立ち止まって助けてくれたかもしれません。

でもそれは少女には、とても難しいことだったと思います。もしそんなことがお父さんの耳に入ったら、もっと怒られる、殴られるかもしれません。そしてもしその結果家から追い出されたら、少女は本当に行くところが無くなってしまふからです。

あのときの少女にとっては、お父さんのいうことを聞いてマッチを売ることだけが、家に帰り、自分を守るためのたった一つの方法だったのです。

さあ、ではマッチ売りの少女はなぜ死んだのでしょうか。

一番の原因は、周りの無関心です。寒い雪の日、大みそかに靴もはかず帽子もかぶらずに震えながら小さな女の子が一人でマッチを売っている・・・この姿を見ても、だれも立ち止まる人はいませんでした。もしこのときに、「ひとりでこんなところでどうしたの？お父さんは？お母さんは？」と声をかける人がいたら、「マッチを売って帰らないとお父さんに怒られるのです」と少女は言えたかも知れません。そしてそこから、少女は助かる道があったかも知れません。



または「寒いでしょ？」と頭にかぶるものを、「冷たいでしょ？」と足にはく靴を、「おなかがすいたでしょ？」と何か食べるものを少女にくれたり、「一緒に売ってあげるわ」とマッチ売りを手伝って、少女が早く家に帰れるようにしてくれていたら・・・マッチ売りの少女は死ななくて済んだかも知れません。

マッチ売りの少女は、だれもない山奥ではなく、大勢の人が行きかう大みそかの町の中で死んだのです。

これは決して昔の話や童話の中の話ではなく、わたしたちにとって身近な話です。

大阪の小学生の場合も、今回は自分で交番にたどりついたので事なきを得ましたが、探し回っていた犯人に先に見つかっていたら・・・と思うとぞっとします。



今の日本でも、父親の暴力にあっているにもかかわらず、母親が助けてくれずに亡くなった子どもがたくさんいます。また、本当の母親からの虐待が日本が一番多く、事件にはならなくても直接の暴力ではなくても、家庭内で虐待を受けている子どもたちはもっとたくさんいます。

また学校でも、いじめにあい、不登校になったり、自殺に追い込まれたりする子どもたちもいます。

一番良いのは被害にあっている子どもたちが「助けて！」と言えることですが、周りが無関心でその声に耳を傾けてくれなければ、逆にもっとひどい目にあうこともあります。または恐怖や無力感の中で、「助けて」という力さえ、奪われてしまう人もいます。

大切なのは、私たち一人一人があなたの身近にいるマッチ売りの少女(つらい思いをしている人、困っている人、一人ぼっちの人)に目を向けることです。関心を持つことです。自分に何ができるのかを考えることです。

たとえ自分が直接助けてあげるのが無理でも、だれか大人に相談しましょう。声をかけましょう。そっと手をさしのべましょう。隣によりそいましょう。



マッチ売りの少女と同じように、虐待で亡くなった子、いじめで自殺した子の話を聞いて「かわいそうに」と涙する人は多くいますが、一番大切なのは、その前に自分で何ができるかを考えて実際に行動することです。

さあ、あなたの周りにマッチ売りの少女のように、助けてと言えないままつらい思いをしている人はいませんか？または、マッチ売りの少女のようにひとりで耐えている人はいませんか？

だれに相談していいかわからない人はぜひ保健室に来てください。一緒によい方法を探していきましょう。